

# 池田大作の創造的男女平等論

## —池田思想におけるジェンダーの問題—

杉 山 由紀男

### 1. はじめに

男性と女性、この両性の存在と関係について池田がどのように考えているのか、すなわち彼のジェンダー観を知ることは、池田思想の全体像、とりわけその人間観を把握する上で欠くことのできない課題である。池田の著作に接するとき、人間としての男女の同一性と平等性が力強く主張される一方で、両性の特質や社会的役割の差異についての積極的な言及もまた見出すことができる。

本稿では、池田の諸著作に見られるジェンダーに関連する言説（以下、ジェンダー言説という）を検討することで、池田のジェンダー観にアプローチし、今後さらに彼の実践行動のレベルにおける諸事実をジェンダーの観点から検討することと合わせて、池田の人間観をより精確に把握するための一助としたい。方法としては、池田の全著作におけるジェンダー言説を検討すべきであるが、その数は膨大であり、本稿では研究の手始めとして、池田におけるジェンダー関連の最初のもつた著作で、主として日本人の女性読者向けに書かれたエッセーと見ることのできる『女性抄』（1971年）と、日本人のみならず広く世界の男女の読者向けに語られ書かれたと見ることのできる海外の知識人との対談集の幾つか、そして池田のジェンダー観・人間観の根幹を探る意味で、彼の思想が依って立つ法華経および日蓮仏法思想についての著作である『法華経の智慧』（1998年）、以上の諸著作を中心に、そこに表れている池田のジェンダー言説をとおして、彼のジェンダー観を検討し、その特徴を示してみたい。

### 2. 池田のジェンダー言説（1）—男女の特質と役割の相違—

池田の幾多の著作に目をおしてわかるのは、彼のジェンダー言説には、①男女の特質の違いや役割の違いについて述べたものと、②男女の同一性・平等性を主張したものの二種類が含まれていることである。一見アンビヴァレントなこの2つの言説の関係を精確に理解・整理し、池田の真意に正しくアプローチするために、まずは、彼の諸著作から双方のジェンダー言説の主なもの拾ってみよう。はじめに、前者のジェンダー言説の主なものを、池田のジェンダーに関連す

る最初のまとまった著作といつてよい『女性抄』から拾ってみよう<sup>(1)</sup>。

・女性が、生涯つれそっていくべき男性を選ぶにあたって、なにを基準にするか——といえ、やはり“男らしさ”であろうか。もっと極端にいえば、女性は男性の“男らしさ”にひかれる本能をもっているのかもしれない。(50頁)

・戦後の男女は、共学のおかげで、互いに接触するチャンスに恵まれているとはいえ、男らしさ、女らしさの追求という点については、戦後教育でも、あまり留意されていなかったように思われる。女の子が、男の子をつかまえて『××クン』と呼び、遊ぶのも、体格の優れた女の子がボスになって支配する——スカートとズボンの違いだけが、女の子の証拠というのでは、女らしさも、男らしさもあつたものではない。かえって男女七歳にして席を同じゅうせずとばかり、男女がはっきり切りはなされていた昔のほうが、男子にも女子に対する畏怖心があつたし、女子にも男子に対する敬意のようなものがあつた。私は何も、封建的な昔の行き方にかえれというつもりは絶対がない。一例を引いたにすぎないのだ。しかし、少なくとも、孔子いらい二千数百年にわたって伝えられてきた、人間の智慧を、単純に封建的だといつて、一方的に片付けてしまうのではなく、よいところは、考え直す必要もあるのではないかといいたい。(51-52頁)

・こんなことを挙げると、時代錯誤のようにとられるかもしれないが、要は、男には男の道があり、女には女の道がある。両方がそれぞれの特徴を伸ばし、その上で結合し、助け合っていくところに、本来の人間社会の姿があるといいたいのである。女が男性化し、男が女性化して、男か女かわからなくなり、風俗が紊乱し、道徳が崩れてゆくのは、文化の墮落といわざるをえないと思う。あくまで、女性は男らしい男性を求めべきであり、また、そうなることが正常であろう。それこそ自然の摂理であり、生命の正しいリズムなのである。(53頁)

・わが国のある大哲人は、妻を弓にたとえ、夫を矢にたとえて夫婦のあり方を教えている。夫がどれだけ社会の大空に雄飛し、力強く社会の中で闘っていくかは、ひとえに妻の力にかかっているという意味である。また、その大哲人は妻というものは「夫に随って夫を随わせるもの」ともいっている。偉大な英知からでた、みごとな家庭経営法というべきであろう。男にとって社会は戦場であり、緊張の連続の舞台であるといえよう。家庭はただひとつの心のオアシスであり、安堵の場といつても過言ではない。それを考えると、夫のためにもっとも心を休め、疲れをいやすことのできるようなくふうをすることが、妻としての大事な、そして賢明なつとめになってくるように思えてならない。(67頁)

・母性愛とは、女の行動本能の一つである。イデオロギーの問題でもなければ大義名分の使命感でもない。(80頁)

・家庭における幼児教育の主役は、いうまでもなく、母親である。(中略) 私は、母親の皆さんに、皆

<sup>(1)</sup> 以下、引用は池田大作『女性抄』第三文明社レグルス文庫版、1971年（第3版：2005年）より。各引用文の後に頁数のみ示す。

『女性抄』は1971年4月にグラフ社から出版され、内容は、「幸福」「恋愛と結婚」「妻」「母」「家庭」「子供」「愛」「女性」「人間」「わが師 わが父母」の10章から成っており、主に日本人の一般女性読者に向けて書かれたものである。なお、その前年に文藝春秋社から出版された『私の人生観』に収められたエッセーの幾つかが、字句を中心とする若干の修正を施されて再録されている。出版当時、読者からかなりの、しかも好意的な反響があつたようで、出版の3ヶ月後に第三文明社のレグルス文庫版として再版されている。再版にあたって池田は「予想外に反響があつたことに、いささか当惑している。このたび、第三文明社から、文庫版にしたい旨、強い要請があり、私としては、恥のうわぬりみたいで気のすすまぬまま、承諾してしまった」（レグルス文庫版にあたって）と率直に述べている。本書からの引用は、本来であれば1971年のグラフ社版から行うべきであり、その方が言説の歴史的变化も把握しやすいが、ここではそうした歴史的变化よりも池田の言説の真意を探ることが主眼なので、内容的には基本的に当時のままで、字句を中心とした改訂であることから、あえて改訂版から引用した。

さんは子供たちの生涯の基礎を決める、もっとも大事な人生の教師の立場にあることを強く訴えたい。(124-125頁)

・献身的な愛の典型は母性愛である。子供の中に自分を投げ捨てる、それほど徹底しているのが母性愛であり、それは生命の本能といえる。しかし、時として盲目的な愛に陥りやすい危険もある。愛情のない母親はまずいない。要は、その愛情の注ぎ方に、手落ちや、気ままや、気まぐれがあれば、かえって子供の人格を傷つけ、ゆがんだ性質にしてしまうことに気づかねばならない。(127-128頁)

・私は、女性が女性として最高の力を出すとき、女性の本領が発揮されるときは、母となった人が、新しい生命を全魂かたむけて慈しみ、はぐくむときであると思う。また、女性としての本当の美しさを全身にたたえるのも、母となったときではないだろうか。(84頁)

・母親は、家庭がもっとも重要な教育の場であり、自己が最高の使命ある教師であることに、もっとも強い自覚を持つべきだと思う。(92頁)

・妻にとっては、夫が職場にあって、存分に働けるように、これを支えることが役目である。その意味では、妻の役割は、いかにも損のように見えるが、夫は夫で、職場では、それ以上に自己をおさえ、屈従を余儀なくされていることを理解しなければならないと思う。(152頁)

これらを見ると、男性と女性の特質の違い、「男らしさ」や「女らしさ」が強調され、一見、旧来の「妻の役割」「母の役割」が積極的に肯定されているようにも思える。

では、日本人女性にではなく、広く世界の男女に対して語られ書かれたとみることのできる各種の対談集ではどうであろうか。世界的に評価されている研究者や知識人を相手にした対談で、池田は男女の特質や役割の違いについてどう語っているのだろうか。

・今日、物質的な生産活動に関しては、何をつくるにしても男性のほうが主導権を握っていくことは避けられないでしょう。しかし、物質ではなく人間、それも非常に繊細で鋭敏な感受能力をそなえた幼児を、一人前の人間に育て上げていくという、この人間を対象とする生産活動は、男性よりも女性のほうが適しています。女性には、心の繊細な変化に対して鋭敏であるという特性、しかも、献身的な愛情を捧げるという特質があるからです。(池田大作/A・トインビー『二十一世紀への対話 上』文藝春秋社、1975年、219頁。)

・残念なことに今日、離婚に至る家庭が増えています。(中略) 男女平等ということにしましても、男性と女性の特質や役割を度外視して、双方ともに無理解、非協力を嘆くようになります。そこに、女性も自活できるという社会的条件が加われば、離婚という事態にともすれば陥りかねないでしょう。(池田大作/アナトリー・A・ログノフ『第三の虹の橋』毎日新聞社、1987年、119頁。)

・母性というものの素晴らしさを譬えたものとして、日本に「焼野の雉 夜の鶴」という言葉があります。野を焼かれたキジがわが身を犠牲にして子供を守り、鶴が自分の羽で子供を包みこんで夜の冷気を防ぐ——いずれも、母の子を思う慈愛を譬えたものです。(中略) この捨て身の愛情の強さ、深さという点では、男性はとて女性に敵わないと、私は思っております。(池田大作/C・アイトマートフ『大いなる魂の詩 上』読売新聞社、1991年、94-95頁。)

・女性の声には、強さがあります。子どもたちの未来を守り育てるという責任感があるからでしょう。ゆえに、二十一世紀は、女性があらゆる分野で活躍することによって、平和を守る「生命の声」で社会を変革し、やがては文明の質をも変革していく時代であると、私は思っております。女性は本来、生命を慈しみ守りゆく、豊かな感性をもった平和主義者であると信じるからです。(池田大作/フェリックス・ウンガー『人間主義の旗』東洋哲学研究所、2007年、193頁。)

・男性と女性の特性を、最大に生かしていくことが、より価値的であり、社会の進むべき方向だと、私も思います。(池田大作/ヘイゼル・ヘンダーソン『地球対談 輝く女性の世紀へ』主婦の友社、2003年、253頁。)

・女性は本来、現実主義者であると同時に、生命を慈しみ守りゆく、豊かな感性をもった平和主義者です。そして正義感が強く、真面目で、忍耐強い。私の長年の経験に照らして、そう確信しています。(同上書、256頁。)

・男の子であれ女の子であれ、男と女という異なった特質をもつ親が、その初期の人格形成に関わることは、やはり重要です。もし不幸にして、片親だけの場合、その片親は、両方の親の特質を兼ね備えて、子供に対することが必要となります。その意味でも、結婚制度と家族制度は、人間が人間らしく育ち、人間らしさを保持するための不可欠の条件であり、その立場から、性のモラルも確立されなければならないと私は考えます。(池田大作／B・ウィルソン『社会と宗教 下』講談社、1985年、205—206頁。)

・家庭教育では子どもたちが幼いほど、父親よりも母親の存在のほうが大きな重みを持っているようです。「教育の父」ともたたえられるスイスのベスタロッチも、教育の重点を「心」の教育に置き、家庭教育、なかんずく母親の役割を重んじています。(池田大作／アリベルト・リハーノフ『子どもの世界 青少年に贈る哲学』第三文明社、1998年；聖教ワイド文庫版2008年、236—237頁。)

・価値観や人格を教え、社会のルールを教えるといった本来の「父性」の役割—かつての家父長制は、もちろんマイナス面も多かったが、時代的な制約のもとで、それなりの役割を果たしてきたことは否定できません—までもが機能しなくなっていました。(同上書、287頁)

・母性そのものは、決して幻想ではありません。母性の本質が慈愛であることに何らの疑問もないわけです。そのうえで、このしぜんの営みが変化にさらされているのも事実です。(同上書、320頁)

以上に見た各種対談集における池田の言説からは、『女性抄』における言説と変わらぬ一貫性を見出すことができる。すなわち、その強調の度合いや言説の量的な比重に若干の変化はあるにせよ、男女の特質や役割の違い、また「男らしさ」や「女らしさ」が基本的には肯定されている。しかし、そうした男女の特質や役割の差異、あるいは「男らしさ」や「女らしさ」の中身を池田がどう考えているのか、そしてそれらが池田の人間観全体の中でどのような位置と意義を持つかが検討されなければならないだろう。それには、池田のもう一方のジェンダー言説を見る必要がある。

### 3. 池田のジェンダー言説(2)—男女の同一性と平等性—

男女の同一性と平等性に関する池田の言説の主なものを、まず『女性抄』から拾ってみよう。

・言葉の使い方になるが、結婚にゴールインするというのも、誤解を生みやすい、適切でない表現なのである。結婚は、むしろスタートと考えなくてはならない。しかも、夫は、妻と家庭にたいする責任、妻は、夫と家庭にたいする責任という重荷を、それぞれ背負った、過酷なレースであると、私は考えている。(41頁)

・人間の最も美しい姿の一つは、真剣に仕事に打ち込んでいるときのそれである。これは、たんに男性ばかりでなく、女性の場合も同様である。働く女性が若さを失わないといわれるのも、このためであろう。統計によると、働く女性の数は年々増加しているが、動機はどうあれ、これは喜ぶべき現象であると私は考えている。(169頁)

・私がなにより強調したいことは、現在の仕事を通して、なんらかの技能を身につけていただきたいということである。長い人生には、どういう事態が待ち受けているかもしれない。幸福な家庭生活に、いったんははいつたとしても、決して、それは永久につづくものではない。(170頁)

・女性であり、母である以前に、人間として、苦に束縛されない、真実の幸福境涯を築くことこそ、

女性解放の究極なりとも叫びたい。(80頁)

・家庭の窓を大きく社会にむかって開かねばならない。夫の目を通して、社会を間接に見ることはやめなければならない。(中略) 母親も、立派な一個の社会人であると知るべきだ。さもないと、人間としての幸福もなければ、母親としての幸福も、おそらくは摺むことはできないだろう。(81)

・一家にあって、主人一人が専横をきわめ、かつての家長制のように、妻も子も、忍従をしいられるものであってはならない。親の権威に限らず、すべての権威が崩壊しつつある時代である。いよいよ親が馬鹿にされるだけで終わってしまうであろう。(115頁)

・一家の中で主人だけが働いて、あとは食べさせてもらっているという考え方をやめ、立場こそ違え、平等に働いているのだという自覚の方が、はるかに社会的な連帯感を養うことになっていく。子供が学校に通うことも、大事な仕事の一つといえるし、おのおのの人格を尊重することにも通じていくといえよう。(117頁)

・いかなる人生であれ、究極的に帰着するところは、人間として、どのように生きるか、ということである。いいかえると、人間として幸福であったかどうかということが、その人の人生全体の総決算となる。これは男性であろうと女性であろうと、いかなる職業であろうと、身分や階級がどうであろうと、どのように違っておろうか、かわりはない。私はこれまで「妻として」、「母として」の現代女性の生き方を述べてきたが、結局、それらも、最後は人間としてどうあるべきか、という問題になってくるといえる。人間としてということは、妻としてとか、母としてとかよりさらに深い根底にあるものだ。あたりまえのことをいうようだが、妻でない女性、母でない女性があっても、人間でない女性はいない。また、妻であり、母であったとしても、同時に人間であることから、まぬがれないはずである。(195-196頁)

これらを見ると、男女の人間としての平等性が主張され、女性の社会進出を喜び、女性のより一層の自立を願う心情が綴られている。ここに引用したように、池田にとって「人間として」ということは、妻としてとか、母としてとかよりさらに深い根底にあるもの」であって、人間としての男女の平等な尊厳性こそが池田の思想の揺るがぬ根幹であることは言うまでもない。この点は、各種の対談集においても各界の対談相手に向かって力強く主張されている。そして、周知のように、その依って立つ信念の基底は仏教、なかんずく法華経と日蓮仏法である。そこで、ここでは紙面の都合もあり、対談集における池田の言説は取り上げず、法華経と日蓮仏法の思想的な本質を見事に抉り出した『法華経の智慧』における池田のジェンダー言説を見ていきたい。それはおもに、「竜女の成仏」をめぐる議論のなかに見られるものである<sup>(2)</sup>。

・じつは、提婆達多品の竜女の話は、一面から言えば、“威張っている男性が、女性に負けた” “智慧第一の舍利弗も、竜女の信心にはかなわなかった” という物語なのです。また、女性を差別する思想に対して、実証をもって、それを打ち破った「大いなる人権宣言」なのです。(114頁)

・竜女は、法華経という円教を代表している。旧思想の男性軍に対して、新思想を身をもって示しているのが竜女なのです。提婆品は、そういう「思想劇」の側面を強くもっている。(117頁)

・生きとし生けるものに仏界を觀る法華経です。女性への差別など、微塵もありようがない。女性は成仏できないなどというなら、それは一念三千ではありえない。一念三千を否定するならば、自分自身の成仏もない。ゆえに、竜女の成仏は、全女性の成仏を表すだけでなく、じつは男性の成仏をも表しているのです。女性の成仏を否定する男性は、自分の成仏を否定しているのです。皆、そこがなかなかわ

<sup>(2)</sup> 引用は、池田大作、他『法華経の智慧 第三巻』聖教新聞社、1997年から。以下、頁数のみ示す。

からない。(121—122頁)

・[「変成男子」について、成仏のために男性の姿に変わらなければならないのは、やはり女性はまだ差別されているのでは?との疑問に答えて]いや、それは違う。童女の成仏は、あくまで「即身成仏」です。女性の身のままで成仏したのです。変成男子は、舍利弗をはじめ、成仏は男性に限られると思いついていた人々に対して、童女が成仏したことを、わかりやすく示すための方便にすぎないでしょう。男性にならなければ成仏できないという意味ではないのです。そのことは、一番初めに文殊菩薩が童女のことを紹介するくだりで、すでに明確です。童女がすでに成仏していると文殊菩薩は語っているのです。(125—126頁)

・「変成男子」は、他の大乘仏典のなかでも多く出てきます。これも、本来、大乘仏教の「空」の立場から言えば、男性・女性という違いにこだわること自体、おかしい話だし、理論上はまったく必要がない。しかし、それが説かれた時代に、「女性がその身そのままに成仏に成る」という思想には、大きな抵抗が予想されたのでしょう。(128頁)

・ただ問題は、そういう「社会への適応」のなかで、宗教者自身が、次第に社会の差別意識にとらわれてしまう場合です。それでは「法」は、ゆがめられてしまう。その結果、ゆがんで伝えられた教えが、社会の差別意識をさらに助長し、固定化する“悪”となることも多い。仏教の女性観を歴史的にたどっても、そういう紆余曲折があったのではないだろうか。(129—130頁)

・仏法においても、男女の在り方について種々の教えがあるが、説かれた時代・社会における男性観・女性観が当然、反映されています。それらを一概に固定化することはできないでしょう。大切なことは、女性も男性も、人間として「幸福になる」ということです。幸福になるのが「目的」であり、他は「手段」です。「こうあるべきだ」と決めつけ、それが、どんなに正論のように見えても、それを実行して不幸になったのでは何にもなりません。また女性が不幸のままに男性だけが幸福になれるわけもない。(143—144頁)

ここには、童女成仏のいわば「人権宣言」としての思想的意義を明らかにしながら、日蓮仏法の立場から、法華経を完全なる男女尊厳、男女平等の思想と捉える池田思想の真骨頂が遺憾なく表現されている。これほど力強い男女平等論が他にあるだろうかと思われるほど、その主張は感動的である。では、これまで、見てきた池田における二種のジェンダー言説の関係、とりわけ男女の相違に関する彼のジェンダー言説をどのように理解すべきであろうか。

#### 4. 池田の創造的男女平等論

池田のジェンダー言説を考察するにあたって、これまで見てきた池田の言説と、ここでは取り上げなかった池田の諸著作から、彼のジェンダー言説の外面的特徴をまず簡単に整理してみたい。次のようになるだろうか。

- 1) 男女の同一性と平等性の力強い主張とともに、男女の特質と役割の相違についての肯定的な言説が見出されるが、「男女差別」については強く否定されている。
- 2) 男女の同一性と平等性の主張については時期による変化は認められず、揺るがぬ一貫性が認められる。
- 3) 現段階では印象論になるが、男女の特質と役割の相違については、最近の言説のほうが相対的な割合として少ない。しかし、それはあくまで程度の問題であって、ここでもその言説の内容に一貫性が認められる。

4) 男女の特質と役割の相違に関する言説としては、相対的に「男性論」は少なく、「女性論」「母親論」が多い。

5) 「男性論」も「女性論」も共に、成人者向けの言説が多く、青少年向けに「男らしさ」「女らしさ」を強調した言説は少ない。

6) 池田のジェンダー言説は、仏教思想、とりわけ法華経と日蓮仏法に対する彼独自の解釈による人間観に基づいており、諸他の万般の学問がそれを補強している。

この整理をもとに、池田の二種のジェンダー言説の関係を理解し、さらにそれをとおして池田のジェンダー言説の獨創性を明らかにしてみたい。

まず第一に、男女の特質の違い、あるいは「男らしさ」「女らしさ」については、「女性論」「母親論」が多いことを踏まえて、ここでは女性の特徴についての言説を中心に検討するが、池田は「母性」あるいは「母性本能」という表現を時に用いているけれども、彼の中では、これは人間としての同一性と平等性という本質の、自然的ないしは社会的・文化的な個性の顕現として捉えられていると言ってよい。『女性抄』から引用したように、池田は「私はこれまで『妻として』、『母として』の現代女性の生き方を述べてきたが、結局、それらも、最後は人間としてどうあるべきか、という問題になってくるといえる。人間としてということは、妻としてとか、母としてとかよりさらに深い根底にあるものだ」と述べており、人間という根底に対して、社会的・文化的なジェンダーのみならず自然の性についても、いわば表層として捉えているのである。

この点は、仏教の三世の生命観に基づく池田独自の視点からも補強され、「永遠の生命から見れば、男といい女といっても、ある人生では男性となり、ある時は女性と生まれ、固定的なものではありません」<sup>(3)</sup>と見られている。『法華経の智慧』ではさらに、仏法における男女平等面はわかるが、さまざまな男女の現実的な違いは仏法上どう見るのか?との疑問に答えて、「いろいろ見方はあるでしょう。問題は、それらの違いがはたして先天的で、あらゆる時代、あらゆる社会に共通する普遍的なものかどうか。それとも後天的で、その社会の文化・伝統によって形成された違いなのか。その線引きは極めて難しい。今後の諸学問の研究に期待したいと思う。(中略)我々の意識の中にある『男らしさ』『女らしさ』のイメージは、長い間の文化伝統によって深刻に影響されていることは事実です。その影響は言語、宗教、制度、教育、学問の在り方など、全社会の毛細血管にまで、しみ通っていると考えられる」<sup>(4)</sup>とした後で、「ですから、大事なのは、男性はこうすべきだとか、女性はこうすべきだとか、あらかじめ決めつけるのではなく、第一にも第二にも『人間として』『人間らしく』生きていく努力ではないだろうか」<sup>(5)</sup>と語っている。

ここからわかることは、池田における「母性」「母性本能」「父性」「男女の本質的な違い」などの表現は、文字どおりの「本能」や「本質」や普遍性を意味するというよりは、社会的・文化的に形成された可変的な側面を含んでおり、その意味では多分に修辭的なものと見てよいとい

<sup>(3)</sup> 池田大作、他『法華経の智慧 第三巻』聖教新聞社、1997年、146頁。

<sup>(4)</sup> 同上書、142-143頁。

<sup>(5)</sup> 同上書、143頁。

うことである。したがって、男女の役割の相違についても同様であり、『女性抄』を読んで、池田が「男はソト」「女はウチ」などといった固定的な役割規範を女性に求めていると解したならば、それは甚だしい誤解と言わざるをえない。

では、なぜ池田は男女の特質や役割の違いに積極的に言及するのだろうか。なぜ男女の同一性と平等性を主張するだけでとどめないのであろうか。さらに、彼のいう「男らしさ」「女らしさ」の内実とはどのようなものなのであろうか。そして、それらは彼の人間観全体の中でどのような位置と意義をもっているのか。この点の解明こそ、池田のジェンダー言説の真意とジェンダー観の独創性、そしてその人間観の真実を把握するカギであるように思う。

池田はなぜ男女の特質と役割の相違を語るのか。いま、結論を先取りして端的に述べるなら、池田の持つ「創造への意志」にその理由の在り処を見出すことができるように思う。ここでいう「創造への意志」とは、さらに具体的に言えば、1) 理想は現実の上に打ちたてられなければならないという信念、2) 幸福という目的に向かって個人と男女のすべての差異を活かす発想、3) 歴史の中で劣等な価値を与えられてきた女性の特質への期待と敬意、この三点を含んでいるように思う。

第一の点についていえば、池田にとって、男女の同一性と平等性という理想は、男女の差別という冷酷な現実と、少なくとも現時点における男女の相違という否定しようのない事実の上に構築されなければならないのである。池田が述べるように「長い間の文化伝統によって深刻に影響され」て形成された「男らしさ」「女らしさ」という男女の特質の違いは、事の是非はともかく、否定しようのない現実として存在する。男女の平等性を言うあまり、この現実を無視したり、否定したり、そこから逃げたりしたのでは、平等の理想は人々の意識に訴えることはできず、理想は現実化しない。池田は言う。「[釈尊の]悟りの眼から見れば、男女間の上下の差別など、ありえない。ただ、その『法』を社会に広め、定着させていくには、どう説けば受け入れられるかを考えなければならない。『随自意（悟りそのものを、そのまま示すこと）』の信念の上に、『随他意（人々の機根や傾向に従って説き、次第に悟りへ導くこと）』の智慧が必要な場合がある」<sup>(6)</sup>と。周知のように池田の変革運動が漸進主義であるのは、どんな理想も人々に受け入れられなければ実現することはないという信念によるのである。

さらに、池田におけるこの理想と現実の関係について言えることは、理想がすぐさま実現できない時でも、現実を単に批判し否定するのではなく、その現実の真っただ中に希望を見出し、そこから理想の実現を目指していくという創造的発想である。男女平等の実現は池田にとって理想である。しかし、現実には、男性中心の社会であり、その中で女性の特質や役割が押し付けられている。こうした現実の中にあっても、女性がどうすれば希望を見出し、幸福を勝ち取っていかれるのかに池田は腐心し、励ましを送る。池田が「母性愛」や「妻の役割」といった女性の特質や役割に言及するのはこのような心情からであると考えられる。たとえば、『女性抄』では、「幸福というものは、決して他から与えられるものではない。自己の生命の内に築いていくものである。人生

<sup>(6)</sup> 同上書、129頁。

には、嵐の日もあり、雪の日もあろう。だが、自己の胸中の大空には常に太陽が輝き、青空が美しく広がっていればよいのである」<sup>(7)</sup>と語り、「幸福は、けっして山のかなたにはない。自己自身の内にある。しかし、坐して安閑としている自分ではなく、あくまで、かなたにあるものをめざして、けわしい尾根に挑戦し、障害を一步一步、克服してすすんでいる“戦う自分”の生命の躍動の内にあるのだ」<sup>(8)</sup>とエールを送っている。すなわち、女性の特質や役割を単に押し付けられたものとして拒否したり逃避したりするのではなく、あるいは逆にそれらの特質や役割についての意味づけを単に変更することで現実をそのまま受け入れて変革を忘れるのでもなく、女性の特質や役割という現実を足を下ろして理想を目指す、その生き方のなかに希望と幸福があることを池田は訴えている。アメリカをはじめとする戦後のフェミニズムの運動に対して、池田が「“ウーマン・パワー”は単なる造反であってはならない。また、一時的な流行に終わってもならないと思う。現代文明への、深刻な反省の上から、男女両性の特質を再認識し、新しい建設への基点としていくことが大切である」<sup>(9)</sup>と懸念と応援のメッセージを送っているのも、この同じ観点からのものと考えられる。

次に、第二の点についてであるが、上に『法華経の智慧』から引用したように、「幸福になるのが『目的』であり、他は『手段』です。『こうあるべきだ』と決めつけ、それが、どんなに正論のように見えても、それを実行して不幸になったのでは何にもなりません」というのが池田の基本的な発想である。「男子が、子供を産めないのと同様、体質的特性や、性格的な相違によって、男性にはできても、女性には、できないというものがあるのは、やむをえないことではあるまいか。それを指摘することが、男女の差別意識を宣伝することには、断じてならないはずだと思う」<sup>(10)</sup>と語る池田にとって、人間の個性は個人に属するものだけでなく、男女というより大きなジャンルの中にも存在する。それらを幸福のために活かして人間として輝けというのが池田の主張である。ここには日蓮仏法が教える「異体同心」の考え方と、同じく日蓮が明かす「妙」の三義の中の「蘇生の義」に示される発想が見出せる。すなわち、個人の個性や男女の相違を人間という共通性の中に解消して抹殺してしまうのではなく、個人の個性と同様に、男女の現実的な相違もまた個性と捉え、それらを人間という平等性の実現、言い換えると人間としての幸福の実現のために活かしていくのである。

この点に関連し、池田の言う男女の特質、いわゆる「男らしさ」「女らしさ」の内実について触れておきたい。『法華経の智慧』では「いわゆる『男性的なるもの』にもプラス面とマイナス面がある。たとえば、『力』を自在に行使して何かを建設する面があるとしたら、それは場合によっては、権力欲となり、横暴さや破壊となって表れるかもしれない。まさに『悪人』です。提婆達多です。一方、『女性的なるもの』に、多くのものを『包みこむ』特質があるとしたら、それは場合によっては、貪欲に『のみこむ』悪となって表れるかもしれない。(遠藤 鬼子母神は

<sup>(7)</sup> 池田大作『女性抄』第三文明社レグルス文庫版、1971年；第3版2005年、24-25頁。

<sup>(8)</sup> 同上書、32頁。

<sup>(9)</sup> 同上書、181頁。

<sup>(10)</sup> 同上書、177頁。

その典型ですね。) それらのプラス面を最大に輝かせるのが、提婆と竜女の成仏<sup>(11)</sup> であると語っている。この場合のプラス・マイナスの価値基準は、民族的・国家的な価値基準ではなく、平和・幸福・人権などのいわば人類の価値基準であることは言うまでもない。池田が「男らしさ」「女らしさ」に言及した際のその中身を諸著作から列挙してみると、「男らしさ」については、戦闘的・攻撃的、責任感、腕白、論理的思考、粗暴、父性などの表現とともに使われており、一方「女らしさ」については、子供を生み・育む、献身的な愛情、平和主義者、守備型、慈愛、貪愛、盲愛、心の繊細さ、鋭敏な感受性、母性などの表現とともに用いられている。これらを見てわかるのは、「子供を生む」を除くと、いずれも絶対的、本質的な差異ではなく、男性であれ女性であれ身につけることができる性質であることは一目瞭然である。池田は述べている。「あらゆる人のなかに『男性的なるもの』と『女性的なるもの』が両方あると考えられます。(中略) 一人の人間の中に『男性的なるもの』と『女性的なるもの』が調和していなければならない。それが人格の成熟であるし、自己実現でしょう。つまり、男性も、いわゆる『男らしい』だけでは粗暴になってしまう。女性の考え方、感性を理解できるこまやかさ、優しさが必要でしょう。女性の場合も、いわゆる『女らしい』だけでは十分とは言えないでしょう。現代の文化では男性的な特質とされている冷静・沈着な思考力、判断力、展望力などを具えていかなければ、自分自身を大きく開花させたとは言えないのではないだろうか。それは男性の女性化でもなければ、女性の男性化でもない。女性の男性化ならば、それは『変成男子』になってしまう<sup>(12)</sup> と。

すなわち、池田が「男らしさ」や「女らしさ」、「男性的特質」や「女性的特質」、あるいは「男性の役割」や「女性の役割」について語るときには、絶対的な相違として固定的に見ているのではなく、いわば現時点での男性と女性がそれぞれ身につけやすい大雑把な傾向ではあっても、本質的には、人間性の相対的で流動的な性質の一部として捉えていることがわかる。したがって、池田の言葉や表現にとらわれて、男女の特質の違いや役割を義務的なものや固定的なものとして理解すれば、それはまったく池田の意に反するものであろう。男性であれ女性であれ、両方の特質のプラスの面を身につけて発揮すること、そしてマイナスの面をプラスに変えて輝かせていくことが自己実現であり、幸福であると捉えられているのである。

最後に第三の点について述べたい。池田の著作に「女性論」「母親論」が多く、「男性論」や「父親論」が少ないことはすでに触れたが、これは、人間社会の長い男性優位の歴史の中で、差別され、虐げられ、あるいは生き方を制限されてきた女性への、いわば応援歌であり、十分に発揮されることなく歴史の地層の中に埋もれた「女性的特質」の発掘作業でもあるように感じられる。池田の著作に接するとき、「母」「妻」「女性」への限りない慈愛と期待と敬意を読み取るのは筆者だけではないと思う。先に引用したように、ウンガー氏との対談で「二十一世紀は、女性があらゆる分野で活躍することによって、平和を守る『生命の声』で社会を変革し、やがては文明の質をも変革していく時代であると、私は思っております。女性は本来、生命を慈しみ守り

(11) 『法華経の智慧 第三巻』153頁。

(12) 同上書、146-147頁。

ゆく、豊かな感性をもった平和主義者であると信じるからです」と語り、ヘンダーソン氏との対談でも「女性は本来、現実主義者であると同時に、生命を慈しみ守りゆく、豊かな感性をもった平和主義者です。そして正義感が強く、真面目で、忍耐強い。私の長年の経験に照らして、そう確信しています」と池田が語っているのは、男性優位の人間社会が、女性の特質の創造的な偉大さを評価せず、貶め、もっぱら家庭の中になかに閉じ込めることによって、世界を戦争と暴力によって破壊してきたことへの強い批判であると同時に、女性的特質に対する強い期待と尊敬の表れと見ることができる。すなわち、女性的特質を否定するのではなく、それを男性の支配から解放し、そのプラスの面を女性自身の意志と行動で輝かせていくことが平和と幸福への道であると池田は考えているのである。「“ウーマン・パワー”の底流には、単なる、女性の権利の要求にとどまらない、ある種の深い意義がある。それが何かは、簡単にいえない気もする。だが——私は、現代文明の行きづまりを、男性に指導権の一切をもたせてきた、既存の体制の破綻ととらえ、そこに新しい活路を与えていくのは、女性の台頭以外にないという発想が必要ではないか」<sup>(13)</sup>と池田の言葉は実に意味深長と言えまいか。

以上、池田がなぜ男女の特質の違いについて積極的に言及するのか、その理由を探ってきた。あわせて、池田の言う「男らしさ」「女らしさ」の内実を確認した。これらの検討をとおして言えることは、池田にとって、男性と女性という両性の存在は、人間性という根底にとって単に表層としての位置を占めるだけでなく、人間性を実現し、平和と幸福の社会を築いていくための不可欠で対等の宝とも言うべきパートナーなのである。今日、フェミニズムや女性学の多様な諸潮流が水かさを増していくなかで、池田はそれらの運動に好意と期待を寄せながら、他方で、男女が単に平等の権利や処遇を与えられ、正当に評価されればそれでよし、とするのではなく、それらの権利や処遇を人々が幸福のために活かすことができるよう、一人ひとりの人間の生存そのものを強化すること、そしてその強化のために現実的な男女の相違を資源として自発的に活かしていく、いわば「創造的男女平等論」をもって、その具体的な実現のための実践運動を組織しているのである。

終わりに、池田のジェンダー観についての各界からの評価等については、紙面の都合もあって、いちいち取り上げなかったが、今後綿密に検討を加えてみたい。ただ、一言しておくなら、少なくとも池田のジェンダー観が、特殊日本的で、旧来の、型にはまった要素を含んでいるなら、世界の諸大学・機関から250におよぶ名誉学術称号を贈られることはなかったであろうとのみ付け加えておきたい。

<sup>(13)</sup> 『女性抄』177頁。